

造幣博物館ニュース

Mint Museum
News

Vol. **01**
2025.07

造幣博物館ニュース創刊！

造幣局と戦争 I - 貨幣の製造と勲章づくり-



創
刊
号



造幣博物館ニュース 創刊にあたって

造幣博物館は、大阪市北区にある独立行政法人造幣局本局の敷地内にあります。

もともとは、明治44（1911）年に火力発電所として建てられたレンガ造りの建物で、変電室やボイラー室として使われた後、昭和44（1969）年に博物館として生まれ変わりました。

建築当時の外観そのままに改装、復元し、平成21（2009）年には、開館40周年を記念して、「人に優しい博物館、環境に配慮した博物館、魅せる博物館」をコンセプトに大改装・リニューアルオープンし、現在に至ります。館内には、これまでに造幣局が収集してきた国内外の貨幣や、創業当時に貨幣製造に使われた道具や機械などを展示するとともに、現在の造幣局の事業（貨幣製造、勲章・褒章、金属工

芸品の製造、貴金属製品の品位証明等）を紹介しています。

さて、このたび造幣博物館では、様々な情報を皆様にお届けする「造幣博物館ニュース」を発行することになりました。

現在、博物館では年2回の特別展を開催しており、来館された皆様に、造幣局の歴史や貨幣について、より深く学んでいただけるよう様々な取り組みを行っています。

この「造幣博物館ニュース」では、これまでに実施した特別展の内容を中心に、造幣博物館の様々な情報を皆様にお届けしていきたいと思います。

創刊号となる今号では、令和6（2024）年11月から令和7（2025）年2月にかけて開催した特別展「造幣局と戦争Ⅰー貨幣の製造と勲章づくりー」の内容をご紹介します。



「造幣局と戦争Ⅰー貨幣の製造と勲章づくりー」

令和6年11月16日（土）から令和7年2月16日（日）まで、特別展「造幣局と戦争Ⅰー貨幣の製造と勲章づくりー」を開催しました。

この展示は、戦時下の造幣局を、当時の貨幣や様々な記録とともに二期にわたって紹介するもので、本展がⅠ期目となります。「貨幣の製造と勲章づくり」をサブテーマに、昭和初期から昭和20（1945）年にかけて製造された貨幣や、同時期に造幣局が製造した外国の貨幣、そして昭和期に本格的な製造が始まり、戦時下に数多く製造された勲章を展示し、当時の歴史を紹介しました。

ここでは、貨幣や勲章などの展示品に加えて、造幣博物館に残されている当時の写真も紹介しながら、展示の内容をお伝えします。

1. 昭和初期の造幣局とニッケル貨幣の製造

昭和6（1931）年4月4日、造幣局は創業60年を迎え、記念式典が催されました（写真1）。式典では、永年勤続者

と発明考案者の表彰を行い、来賓と局員には、造幣局が製造した「創業六十年記念牌」が送られました。

同じ年の9月、満州の奉天郊外にある柳条湖では、関東軍による鉄道爆破事件（柳条湖事件）が起こりました。これを契機に関東軍が満州全土を占領し、日本は軍国主義の道を歩み始めます。



写真1：創業60年記念式典の様子

そのころ日本国内では、金の輸出が禁止され、金本位制から管理通貨制度に移行したことから、造幣局での金貨の製造も停止されました。その後、経済や財政の軍事化に伴い、重化学工業を中心とする産業が発達し、経済が不況から回復に転じると、造幣局は貨幣の増産体制に入り、繁忙期を迎えました。

昭和8（1933）年、造幣局ではこれまで製造していた10銭・5銭銅貨幣を、純ニッケル貨幣へと改鑄することになりました。ニッケルは耐摩耗性が高く、軍需資材として不可欠ですが、日本ではほとんど産出せず、大部分を海外からの輸入に頼っていました。今後、軍需資材として必要になることを予想し、海外から輸入したニッケルを貨幣として備蓄し、輸入が困難になった時には回収して軍需資材として使用することが計画され、ニッケル貨幣の製造が決まったのです。

また、ニッケルは融点が高いことなどから、造幣局では高周波電気炉を導入するとともに、熱間圧延工程を採用するなど、貨幣製造に技術革新ももたらしました（写真2～4）。



写真2：ニッケル貨幣製造の様子

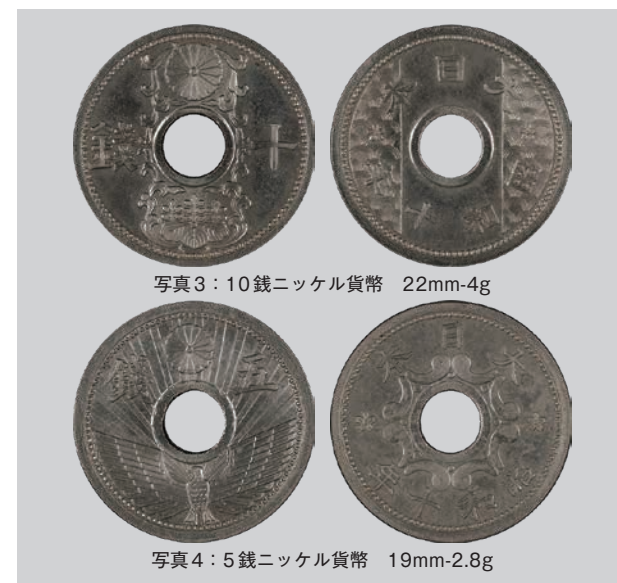


写真3：10銭ニッケル貨幣 22mm-4g

写真4：5銭ニッケル貨幣 19mm-2.8g

2. 臨時通貨法の制定

昭和12（1937）年7月に日中戦争が始まると、日本国内は戦時体制に入りました。昭和13（1938）年には国家総動員法が制定され、国民生活は切り詰められていきます。

その一方で軍需産業が発達し、戦争好況が訪れ、貨幣の需要はますます高まりました。

増大する貨幣需要への対応と、これまで貨幣の材料として使用していた金属を軍需資材に転用するため、政府は臨時通貨法を制定しました。これにより、非常事態になった場合には、これまで製造していた貨幣の発行を停止し、臨時補助貨幣という名称の「戦時貨幣」を発行することが決まったのです。

臨時通貨法制定後、初めて発行された戦時貨幣は、10銭・5銭アルミニウム青銅貨幣と、1銭黄銅貨幣です（写真5～8）。戦時貨幣の材料は、国内の保有、もしくは産出が豊富で輸入の必要がないこと、転用でき、大量生産に適するものであることが条件とされました。この条件を満たす素材として、銅、アルミニウム、亜鉛などが選ばれ、偽造及び鑄潰しのおそれのないもの、という観点から、上記3種類の製造が決定されたのです。



写真5：10銭アルミニウム青銅貨幣 22mm-4g

写真6：5銭アルミニウム青銅貨幣 19mm-2.8g

写真7：1銭黄銅貨幣 23.03mm-3.75g



写真8：昭和13年の貨幣製造風景



図1：公募で応募されてきた貨幣图案の一部

また貨幣の图案は公募で募集されました。応募作品には、「日本精神を宣揚（せんよう：盛んであることを広くはつきりとしめすこと）するもの」という条件が付けられており、当時の日本が置かれていた状況が伺えます。9,331点の応募がありました（図1）。

3. 戦時貨幣の製造

しかし、軍需素材としての銅の需要が増加したことから、昭和15（1940）年、10銭・5銭はアルミニウム青銅貨幣から、純アルミニウム貨幣に変更されました（写真9）。

アルミニウムは他の金属に比べて国内生産が豊富で、入手が容易であることから、新たな貨幣の素材として採用されました。しかし太平洋戦争の開戦により、航空機の増産のためアルミニウムが必要になったことで、その後、昭和16（1941）年と昭和18（1943）年の二度にわたり、貨幣の量目が減らされました（写真10・11）。昭和18年に日本国内における航空機の消耗が激しくなると、アルミニウムはすべて航空機の補給に使われるようになり、10銭・5銭貨幣の素材は、錫と亜鉛に変更されました（写真12）。

錫と亜鉛は、日本の占領地である南方地域や、仏領インドシナ、ビルマから調達しました。溶けやすく柔らかい金属で、流過程で傷みやすく、偽造貨幣の製造を誘発するおそれもあることから、貨幣の材料には適していません。しかし、このような素材を使わなければならないほど、当時の金属需要状況は逼迫していたのです。

こうして昭和19（1944）年に、10銭・5銭錫鉛貨幣と1銭錫亜鉛貨幣の製造が始まりました。しかし、錫が入手困難になったことで、10銭と5銭は貨幣から紙幣に代わり、造幣局では1銭錫亜鉛貨幣のみ製造が続けられました。

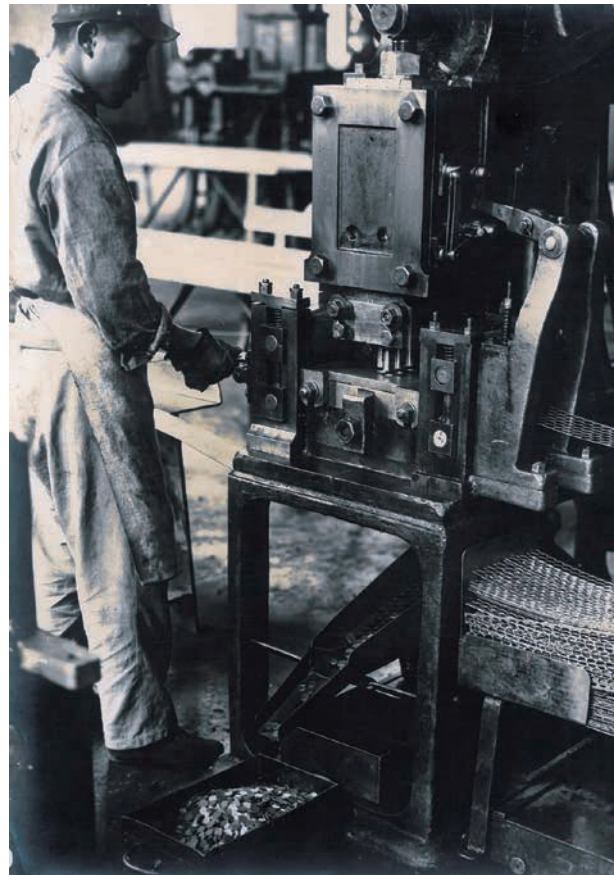


写真9：昭和15年頃のアルミニウム貨幣の製造風景



写真10：10銭アルミニウム貨幣 22mm-1g

写真11：5銭アルミニウム貨幣 19mm-0.8g

写真12：1銭錫亜鉛貨幣 15mm-1.3g



写真13：発見された陶貨幣の箱

写真14：陶貨幣が入っている小袋

4. 陶貨幣の製造

使用できる金属が徐々に減ってきたことから、造幣局では昭和19（1944）年3月から、金属以外の素材を使って貨幣を製造する研究が始まりました。その結果、粘土と長石を主原料とした1銭・5銭・10銭貨幣を製造することが決まり、この貨幣は陶貨幣と名付けられました。製陶業が盛んな京都市、愛知県瀬戸市、佐賀県有田町の3か所に請負工場を指定し、ここに造幣局出張所を開設して製造が始まりました。

請負工場の選定には、

- ① 急速に設備を完了する必要上、新規施設を要せず、既存設備をなるべく多く利用すること。



写真15：10銭陶貨幣 21mm-2g

写真16：5銭陶貨幣 18mm-1.3g

写真17：1銭陶貨幣 15mm-0.8g

- ② 焼成燃料である石炭の確保が容易であること
- ③ 原料の粘土が近接地域に求め得られること（3地方とも、ほぼ同質のものが得られること）
- ④ 労務者の確保が困難でないこと
- ⑤ 空襲の危険の少ないこと
- ⑥ 原料、製品の輸送が困難でないこと

などの点が考慮されました。

陶貨幣を製造する機械は、造幣局で製作していました。しかし、昭和20（1945）年6月15日の大阪大空襲で造幣局の工場の大半が焼失し、改造中だった陶貨幣製造機も焼けてしまいました。その影響で陶貨幣の製造は遅れ、陶貨幣製造機として、ボタンや錠剤の製造機を改造して陶貨幣製造機を製作した、という記録が残っています。

昭和20年8月、京都と瀬戸の出張所で製造が可能になり、京都で約200万枚、瀬戸で約1,300万枚が造られました。しかし日本国内で流通させるのに十分数量ではなかったことから発行を見合わせているうちに終戦を迎え、陶貨幣の製造は中止となりました。これまで製造したものは、すべて粉碎し破棄され、陶貨幣は「幻の貨幣」と呼ばれるようになりました（写真15～17）。

ところが令和5（2023）年、京都市内で大量の陶貨幣が発見されました。製造を請け負っていた会社の敷地内にある古い倉庫から見つかった15箱の陶貨幣は、造幣局に引き渡され、現在も調査中です（写真13・14）。

5. 奉天造幣廠と造幣局

昭和7（1932）年、清朝最後の皇帝であった愛新覚羅溥儀を執政とする満州国が建国され、同じ年に、株式会社満州中央銀行が設立されました。この銀行は、満州国内に流通していた多種類の通貨を整理し、満州中央銀行券によって幣制を統一する役割を担っていました。

貨幣の製造は、昭和8（1933）に満州中央銀行内に設置された奉天造幣廠が行うことになりました。開業した頃の奉天造幣廠は、使用する機械が旧式で不備が多い上に数が少なく、工場の建物の損傷が多かったことから、すぐに貨幣の製造を開始できる状態ではありませんでした。そこで、日本の造幣局から職員を派遣し、設備や技術の指導を行い、

新たに導入した機械や、日本の造幣局から譲り受けた機械を使って貨幣の製造体制が整えられました。

その後、昭和8年から昭和11（1936）年にかけて、多くの造幣局員や、造幣局を退職した職員が派遣され、奉天造幣廠の中の様々な部署で勤務し、満州国の貨幣製造を支えてきました（写真18・19）。



写真18：奉天造幣廠の職員



写真19：満州国1角白銅貨幣 21mm-3.5g

そういった造幣局職員の一人、藤井南海男は、昭和9（1934）年に満州に渡り、奉天造幣廠で勤務しました。終戦後は日本に引き揚げ、再び造幣局に勤務しましたが、当時の思い出を次のように語っています。

「毎日、廠員全員に無料で給食をやって居り、工人は高粱食に一菜、職員は五、六品の中華料理に白米の御飯と饅頭は食べ放題となって居り、当時の造幣局の昼食とは較べものにならない。然しこれもその後、内地の空気が浸透してくるに従い、次第にせちがらくなって、一年余りで給食も廃止となり、食費も出し、内地なみの盛り切り御飯で一菜となって仕舞った・・・」（『満州造幣廠の思い出』（『時報』昭和37（1962）年1月 造幣局発行）より）

「私は昭和20年9月1日から、まる1年国民政府臨時職員になり、あと始末をしました。昭和21年9月から、奉天から屋根のない貨車に乗ってノロノロ運転で大連まで、大連から船で胡芦島に着いたとき、日の丸の旗をつけた日本の船が、私達の乗船を待っていました。このときの感激は忘れることができません。』（『満州の想い出』（『造幣局百年史』昭和51（1976）年 大蔵省造幣局発行）より）

6. 勲章づくり

日本の勲章制度は、明治8（1875）年の太政官布告によって定められました。造幣局では明治期にも勲章製造の一部を担っていたことがありましたが、長らく民間で製造され造幣局が携わることはありませんでした。造幣局が本格的に勲章づくりの業務を行うようになったのは、昭和4（1929）年からでした。

大正14（1925）年、当時の造幣局長永井繁（ながい しげる）が中国出張の際に、国営の勲章工場を見学したことが契機となり、造幣局で勲章を製造する準備が進められました。

永井局長が、賞勲局と交渉を重ねる一方で、局内には彫刻家畑正吉（はた しょうきち）を所長とした彫刻研究所が設置され、勲章の試作作業が進められました。

ところが当時の造幣局には、勲章づくりに不可欠な七宝の技術がありませんでした。七宝とは、金属にガラス質の釉薬を盛り付け、焼き付ける技術のことで、一定の色合いを出すことが難しく、専門的な能力が求められます。そこで、永井局長の小学校時代の同級生で、七宝焼きの家元の当主でもあった二代目平田春行に協力を仰ぎ、職人数人を造幣局員として採用することで、七宝作業の技術を得て、勲章製造の全工程を行う準備が整えられていきました。

大正時代、第一次世界大戦による戦争好況の影響で造幣局は貨幣製造量の増産が求められ、人員を増加して対応してきました。ところが、世界恐慌の発生や、大正12（1923）年9月に発生した関東大震災により、日本国内が大不況に陥り、貨幣の需要が激減します。その結果、大正13（1924）



写真20：昭和13年の勲章製造風景



写真21：金鷄勲章功1級

年に大規模な人員整理を行い、多くの職員を解雇しました。

貨幣の製造量と職員数が減少していた時期に始まった勲章づくりは、造幣局に新たな仕事を生み出し、戦時中は、貨幣製造に次ぐ重要な業務となりました。昭和9（1934）年から昭和20（1945）年には、満州国から依頼を受けて、同国の勲章を製造していたこともあります（写真20）。

また、戦前の日本には金鷄（きんし）勲章という名前の勲章がありました。武功のあった陸海軍の軍人や軍属の者に与えられた勲章で、明治23（1890）年に制定され、昭和22（1947）年に廃止されるまで、10万8,652人に授与されました。造幣局での製造は昭和7（1932）年から始まり、昭和20（1945）年まで、45万4,538個を製造しました。

剣、楯、矛がデザインされ、「軍気を振興し、軍人を奨励する為め」に制定された金鷄勲章は、当時の日本における「武勲の象徴」でした。今は廃止されているこの勲章の存在も、戦争の記憶を後世に伝えるものの一つではないでしょうか（写真21）。

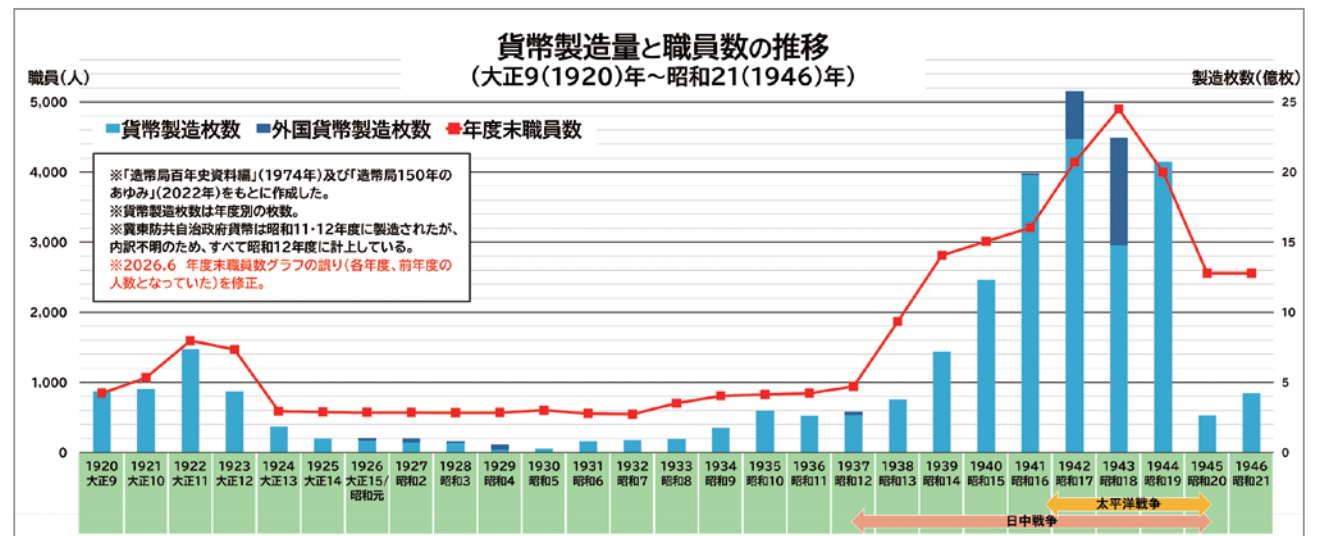
戦争は、貨幣だけでなく、造幣局の業務内容や職員の生活にも、大きな影響を与えました。また、空襲や原爆の被害、材料や人員の不足から、貨幣の製造が困難だった時期もありました。この様子は、令和7（2025）年7月から開催する特別展「造幣局と戦争Ⅱ」で、詳しくご紹介します。

参考文献

平田春行（編）『大日本帝国勲章記章誌』 平田春行 1918年（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/967000>（参照2024-11-8））
「勲章ものがたり」（写真週報16号 昭和13年6月1日号 内閣情報局1938年 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A06031061100、写真週報（国立公文書館））
杉田芳郎 「今次大戦末期における陶貨の製造」（『窯業協會誌』 64巻1956年 723号）
「陶器製補助貨幣について」（『時報』 第113号 1967年3月 造幣局発行）
土屋喬雄・山口和雄（監修）『図録 日本の貨幣10』 東洋経済新報社 1974年
土屋喬雄・山口和雄（監修）『図録 日本の貨幣9』 東洋経済新報社 1975年
土屋喬雄・山口和雄（監修）『図録 日本の貨幣11』 東洋経済新報社 1976年
総理府賞勲局監修 『勲章』 毎日新聞社 1976年
総理府賞勲局（編）『賞勲局百年資料集 上』 大蔵省印刷局 1978年
相原正 「国産ニッケルと国産コバルトの生産と利用の展開」（『明星大学研究紀要 理工学部』1987年 第23号）
満洲中央銀行史研究会 『満洲中央銀行史』 東洋経済新報社 1988年
波形昭一・木村健二・須永徳武（監修）『社史で見る日本経済史 植民地編第5巻』 ゆまに書房 2001年
安達宏昭 『戦前期日本と東南アジア—資源獲得の視点から—』 吉川弘文館 2002年
安達宏昭 『「大東亜共栄圏」の経済構想—圏内産業と大東亜建設審議会—』 吉川弘文館 2013年
平山晋（編）『明治勲章大図鑑』 国書刊行会 2015年

※造幣局の歴史に関する記述は、下記の文献を参照して作成しています。
造幣局（編）『造幣局七十年史』 造幣局 1942年
大蔵省造幣局（編）『造幣局八十年史』 大蔵省造幣局 1958年
大蔵省造幣局（編）『造幣局百年史』 大蔵省造幣局 1974年
大蔵省造幣局（編）『造幣局百年史 資料編』 大蔵省造幣局 1974年
造幣局150年史編集委員会（編）『造幣局150年のあゆみ』 独立行政法人造幣局 2022年

今回掲載している貨幣等の資料の詳細については、造幣局ホームページ内に掲載しております展示品リストをご参照ください。
https://www.mint.go.jp/enjoy/special-exhibition/special-exhibition-etc/enjoy-event-plant_special_241106.html



次回特別展のご案内



令和七年度 造幣博物館 前期特別展

造幣局と戦争 II

－戦時下を生きた職員たち－

開催日程

2025年7月19日(土)～9月15日(月・祝)

戦時下の造幣局で働いていた職員たちにスポットを当て、変化する生活や業務内容、戦時中の職員育成、陶貨幣の意外な事実、広島支局開設の経緯と原爆被害、大阪本局と東京支局の空襲被害などについてご紹介します。

特別展は、さいたま支局の造幣さいたま博物館、広島支局の造幣展示室でも開催予定です。

編集後記

「造幣博物館ニュース」創刊号をお読みいただき、ありがとうございます。創刊が決まり、準備をすること数か月、ようやく皆様の元にお届けすることができました。

創刊号では、令和6年11月から令和7年2月にかけて開催した特別展の内容をお伝えしています。戦争をテーマにした展示を行うのは造幣博物館では初めての取り組みで、どんな構成にしようか、どんな資料を展示しようか、悩みながら作りました。展示した貨幣や写真と共に特別展の内容を紹介していますので、お読みいただき、戦時下における貨幣と勲章の歴史を知っていただければ幸いです。

また、表紙には令和5年に京都市内で発見され、現在、当館で全量を引き取り調査中の陶貨幣の写真を載せています。大変貴重な資料ですので、「造幣博物館ニュース」創刊号の表紙にも登場してもらいました。

引き取った陶貨幣については調査を続けていますが、その途中経過を、新事実も含めて、7月から開催する特別展「造幣局と戦争II－戦時下を生きた職員たち－」で紹介します。陶貨幣のことも含め、戦後80年を経て当時の造幣局を振り返ることは、わたしたち、今を生きる造幣局職員にとっても強いインパクトを与え続けています。読者の皆様にも、万博のついでにぜひ、7月からの造幣博物館特別展にも足を運んでいただければと思います。

なお、今後も「造幣博物館ニュース」では、当館で開催した特別展の内容などを中心にお伝えしていく予定です。今回ご来館いただけない方も、令和7年11月ごろに発行予定の次号にて、「造幣局と戦争II－戦時下を生きた職員たち－」の内容をご覧いただけます。また、造幣局公式ホームページやSNSアカウント、さらに「博物館ブログ」にも随時、特別展の模様などの博物館情報を掲載していきますので、そちらもぜひご覧ください。

(学芸員 澤崎瞳)

造幣博物館

入館料無料

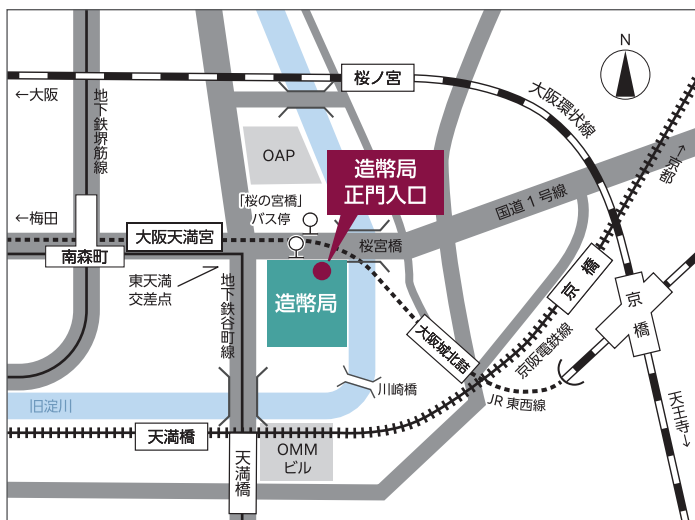
開館時間 9:00～16:45(入館は16:00まで)

休館日 毎週水曜日、年末年始、「桜の通り抜け」開催期間
※特別展期間中の土曜・日曜・祝日も開館

アクセス 京阪電鉄・大阪メトロ谷町線「天満橋駅」徒歩約15分
大阪メトロ堺筋線・谷町線「南森町駅」徒歩約15分
JR東西線「大阪天満宮駅」徒歩約15分
JR環状線「桜ノ宮駅」徒歩約15分
◎ご来館にあたっては公共交通機関をご利用ください。

お問合せ先 TEL:06-6351-8509(直通)
独立行政法人造幣局 造幣博物館
大阪市北区天満 1-1-79

博物館へは、造幣局正門入口よりご入館ください



造幣博物館ニュース 第1号 2025年7月発行
編集・発行/独立行政法人 造幣局 広報課(造幣博物館)
大阪市北区天満 1-1-79 TEL: 06 (6351) 5105

造幣局ウェブサイト
<https://www.mint.go.jp/>

